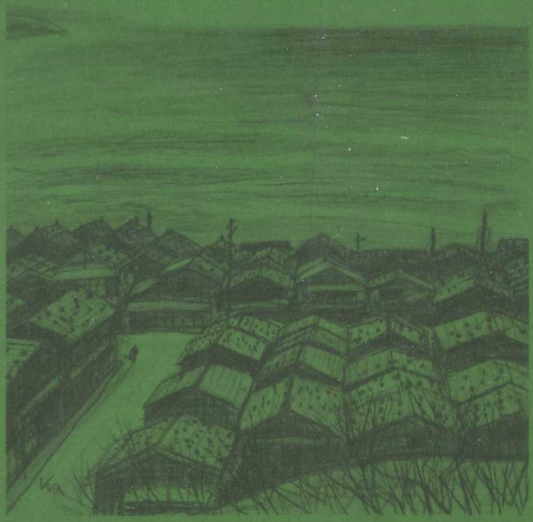

青春の門

五木寛之

再起篇　上

講談社

青春の門　第六部　再起篇　上　定価　九八〇円

著　者　五木寛之

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

印刷所　豊国オフセット株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

第一刷発行　昭和五十五年十一月二十五日
第二刷発行　昭和五十六年　二月　六　日

©五木寛之　一九八〇年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-306874-2253（0）　(文2)　Printed in Japan

目次

春の突風　5
令嬢と新聞少年　26
新宿歌舞伎町界隈（かいわい）　48
決断する夜　79
人生の岐路（きろ）に立って　109
青葉の匂いの中で　140
共棲（きょうせい）生活の始まり　160
百鬼夜行の世界へ　185
老作詞家の賭け　209
哀歌の誕生　247

装幀　村山豊夫
題字　菅　甘林
表紙絵　さしえ　風間　完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

青春の門

再起篇　上

春の突風

伊吹信介はゴムホースから勢いよくふき出す水を、黒い乗用車の屋根にそそいだ。巨大な五七年型キャデラックの屋根から、水が流れをつくってボンネットの上にひろがってゆく。

水はまだ冷たかった。春、三月とはいえ、昨日はみぞれまじりの雪が降って、道路はまだぬかるんでいる。

屋根からボディの側面を水で流したあと、信介はフェンダーの下や、バンパーなどにこびりついた泥を洗い落しはじめた。タイヤにもついでに、水をたっぷりくれてやる。

彼は、ゴム長に作業衣という恰好で、右手にブラシを持ち、熱心に車を洗っている。水洗いをすませたあとは、セーム皮でよく車体をぬぐうのだ。

〈あと二十分はかかるな〉

信介は腕時計を眺めた。六時三十分。

この車の持主である実業家の林三郎は、七時きっかりに家を出るのが習慣である。それまでに車内の清掃もすませておかなければならない。

ふだん丁寧にワックスがけをしてあるので、車の汚れは比較的らくに落ちた。水をぬぐって、柔らかなセーム皮で車体をみがくと、黒のキャデラックはたちまち見事な輝きをとりもどした。

「おはよう！」

額に汗をにじませて車をみがいている信介の横を、自転車に乗った新聞配達の少年が声をかけて通りすぎた。

「おはよう！」

信介も片手をあげてその声に答えた。少年は夜間高校に通っている原田次郎という高校生なのだ。

この家の書生兼運転手として信介が住込んだ最初の頃、彼はまだ中学生の新聞配達少年だった。親しく口をきいたことはないが、負けず嫌いの性格らしく、どんな嵐の日や、雪の日も、一度も配達をさぼったり、おくれたりしたことがない。

信介は、ひそかにその少年を、えらい奴だ、と思っていた。

「水、冷たいだろ」

と、車の下回りを洗っている信介に、背後から声が降ってきた。ふり返ると、自転車に乗って片脚を地面につけたまま、頬を赤く染めた少年が笑っていた。

「まあね」

信介はホースを地面におき、水道のせんを締めると、

「そっちこそ大変じゃないか。夕刊もあるんだろう？」

Kra

「うん」
新聞配達の高校生は、笑顔のままうなずいて、
「おたく、伊吹さんっていうんだね」
「そうだよ。それがどうかしたのかい」
「いや、福岡の炭鉱のほうから来た人だって、ここのばあやさんに聞いたもんだから」
信介は相手の言葉の意味を解しかねて、少年の顔を見た。
「福岡出身だったら、なんだっていうんだ」
「一部あげるよ。サービスだ。じゃあ、また」
少年は右手でシュッと新聞をしごくと、信介に向けてひょいと放った。信介はそれを片手で受けとめた。配達の少年は、もう一度、笑顔でうなずくと、ペダルを踏んで早朝の高級住宅街の坂道をくだって姿を消した。
〈いったい何のことだろう?〉
信介は車のドアをあけ、運転席に坐って新聞を眺めた。
一面の上段に黒っぽい写真がのせられ、大きな見出しがその上に躍っている。
〈三井三池、両組合員が激突〉
横に並んだゴシックの文字と、その下の、
〈百十余人が重軽傷、きょうは就業できず〉
という五段見出しが目にとびこんできた。
写真にはヘルメットをかぶって乱闘する男たちの姿が、不気味にとらえられている。信介は、暗い

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

気持ちでそのニュースを読んだ。
大量人員整理問題に端を発した三井三池鉱業所の争議の記事が、このところ連日のように新聞の紙面をにぎわしていた。三井三池は筑豊ではない。大牟田の大手炭鉱だが、信介にはやはり他人ごととは思えぬ事件だった。
首切りにからんだ争議は、めずらしくはなかった。信介も少年のころから、何度となくそんな騒ぎを見聞きしてきている。
だが、いま、三井三池の鉱山で争っているのは、第一組合と第二組合という、ともに炭鉱で働いている労働者同士なのである。そのことが信介を居ても立ってもいられない、重苦しい気分に駆り立てているのだった。
〈どうしてこういうことになるのだろうか？〉
信介は新聞を開いたまま考え込んだ。そんなことは自明の理だ、と、笑われるかもしれない。信介自身も学生たちのセクト間の激しい内部闘争を、身をもって体験している。それにもかかわらず、彼にはまだ割切れない感じが残っていて、それが信介の心を波立たせるのだった。
〈同じ働く者同士が、なぜ血を流して闘わなければならないのか？〉
信介は自分に正直でいたいと思っている。わからないことは、ごまかさずにわからない、と言い切ることから始めようと考えていた。しかし第一組合と第二組合との対立には、労働者側への会社側の巧妙な内部攪乱戦術の定石だ、と言い切ってすまされないものがあることを彼は感じていたのだ。
その新聞をひろげたまま、思いにふけっている信介の耳に、やわらかいバリトンの声がひびいた。
「おはよう。出かけるぞ、伊吹くん」

信介はあわてて新聞を折りたたみ、作業衣のポケットに押しこんだ。
「すみません。すぐに支度をします」
ドアの前に三つ揃いの背広を着た恰幅のいい初老の紳士が立っている。その背後に、ほっそりした髪の長い少女が、黒のアタッシェケースを両手で抱いて微笑していた。
この家の主人であり、いくつもの企業の経営者であると同時に、中央経済団体連合会という経済団体の常任理事も兼ねている実業家、林三郎と、その娘、みどりの二人だった。
「まだ七時五分前だ。そうあわてなくてもいい」
林三郎は娘のみどりの手からアタッシェケースを受取ると、信介があけたドアから、ゆったりした動作で車の中へ体をすべりこませた。
「すぐに来ますから」
信介はゴムホースとブラシを持ち、急いで車庫へ駆けこんだ。作業衣とゴム長をぬぐと、白シャツと紺の上衣に着かえ、車にもどった。
「すみません。きょうは丸の内の本社へ先においでになりますか」
「いや、中経連のビルへ寄ってから、通産省へ回る。急がなくてもいいから、ゆっくりやってくれ」
「はい」
信介はガラスごしに微笑しているみどりの方をちらと眺め、軽く目礼した。いってらっしゃい、というように、みどりがうなずいた。
「出します」
サイドブレーキをゆるめ、アクセルを踏むと、巨大なアメリカ車は重々しく動き出した。

このあたり一帯は、田園調布や成城などとはまたちがった雰囲気を持つ、落着いた高級住宅街である。有名な映画スターの家の前を左折し、坂を降りて少し走ると、第二京浜国道に出る。

まだ道路はそれほど混んではいない。この分なら赤坂の中央経済団体連合会の本部まで四十分あまりで着けるだろう。

「ラジオをつけましょうか」

信介がたずねた。

「いや、ラジオはいい」

林三郎はよく響く声で言うと、

「どうせ殺伐なニュースばかりだろう。朝っぱらから、気が重くなるような話は聞きたくないからね」

信介は車の流れに乗って、強力な駆動力を持つアメリカ車を、慎重に走らせた。黒塗りのキャデラックは、ゆっくり走っていても、周囲の車をしたがえて走っているように見える。荒っぽい運転をしがちな軽トラックなども、追突でもしたら面倒だと思うのか、かなり車間距離をとってついてくる。

「ところで、きみはさっき、何をぼんやりしていたのかね」

うしろの座席から林三郎の声がたずねた。悠然と構えていても、実は鋭い神経の持主なのだ。彼の目はごまかせない。信介は正直に答えた。

「新聞のニュースを読んで、いろいろ考え込んでいました。すみません」

「いや、謝ることなんかないさ。新聞のニュースというと、例の三井三池の争議の問題かい」

「ええ」
信介は言葉ずくなにうなずいた。林三郎の声が返ってきた。
「そうか。たしかきみも福岡の炭鉱地帯の出身だったな」
「はい。でも、ぼくは筑豊ですから。三井三池は大牟田で、場所はちがいます」
「しかし、気になるだろう、やはり」
「そうです」
信介は信号の赤でブレーキを踏みながら、さっきから林三郎に質問したくてうずうずしているある考えが、不意に喉もとまでこみあげてくるのを感じた。
「炭労から斡旋申請を受けた中労委は、職権斡旋も考えているらしいが――」
と、林三郎がひとりごとのように言った。
「しかし、三井三池はかなり難航するだろう。これ以上、血を流すのを黙って見ているわけにはいかんが、といって、エネルギー合理化の国家政策を中途で投げ出すわけにはいかんしな。むずかしいところだ」
信介は黙っていた。質問したいことは、山ほどあった。そして、この背後に坐っている温厚な初老の紳士、林三郎はそれらの質問に対して、その気になれば本当のことを信介に知らせることのできる立場にいる人間なのだ。
「話は変るが――」
と、しばらくして林三郎がたずねた。
「伊吹くんが、私のところへ来てからどれくらいたったかな？　二年、いや、もっとになるか」

「二年半ぐらいだと思います」
「そうか、早いもんだな」
林三郎は、そのまま黙りこんだ。信介は、林三郎がなぜ急にそんなことを言い出したのか、わからなかった。
〈二年半、か――〉
伊吹信介が林家に書生のようなかたちで住込んでから三ヵ月ほどは、庭の手入れや、犬の散歩や、雑用の手伝いなどをして日が過ぎた。やがて林三郎の言いつけで、彼は自動車教習所に通わせられた。これまで見よう見まねでトラックの運転まではやったことがあるのだが、正式に車の運転を基礎からおそわるのは、はじめてだった。やがて信介が免許証を手に入れると、林三郎は彼を自分の車の運転手として使うようになった。前からいる運転手は、もう一台ある家族用の車のほうを受持つことになった。
それから今日まで、信介はただ忠実に実業家の運転手としての仕事にはげんできた。信介には、ある意味で、そんな生活が必要だったのだ。
何も考えず、何も夢想せず、ただ単純な仕事の中で日を送る――、そんな日常を彼は無意識にもとめていたのだろう。
それは一種の空白の期間だった。特別に何かをめざして努力をするというわけではない。どこへ行こうかと迷いに迷うというわけでもない。ただ、無為に時間が過ぎてゆく、そのことがささくれだった信介の心を自然と蘇生させてくれるように感じられたのだ。
その間、信介はこれまで彼の周囲にいて、さまざまなかたちで彼を支えてくれた石井、カオル、緒

方、英治、トミちゃん、梓先生、そのほかの人びとと、まったく交渉を断っている。
緒方から一度、手紙がきたことがあったが、信介はその手紙に返事を書かなかった。
彼は何もかも、すべてを忘れて一から出直したかったからだった。自分がこの世間で、ほとんどとるに足らぬ石ころのような存在でしかないことを、いやというほど自覚し、そこから出発したかった。いわば自動車レースに出場した車がリタイアする、そんな状態に自分を置くことが彼には必要だったのである。
「そろそろ、別なことをはじめるかね」
考えこんでいる信介の耳に、林三郎の声が響いた。
「いつまでも車の運転をしているわけにはいかんだろう。私にとっては、きみは実にいい運転手だったが、このへんでひとつ、転身することも考えるべきだろうな」
「何をすればいいんでしょうか」
「外国語をやらんか」
「外国語？」
「そうだ。英語でもいい。スペイン語でもいい。中国語でも、ロシア語でもいい。実戦的な外国語をひとつ、勉強してみんかね」
「ぼくは英語が一番の苦手でした。たぶん外国語をマスターする才能には、恵まれていないと思います」
「やってみなければわからんさ」
林三郎は淡々とした口調で言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook